

物語の宗教性に関する心理学的考察

大澤 千恵子

物語にみる宗教性について、ファンタジー児童文学誕生の契機となったアンデルセン童話を手がかりに、精神分析臨床や発達心理学の視点からの考察を試みた。

西欧の土着的な妖精信仰と深い関わりを持った空想的な民話・昔話は、フランスのペローやドイツのグリム兄弟によって近代的なおとぎ話として制度化されたが、彼らの物語における超自然的なものに対する態度は、それらが信じられていた時代とは一線を画す近代的知性に基づいたものであった。つまり、彼らにとっては、妖精などは信じるに値しない存在であるからこそ「妖精物語」としてお話の世界で語られているのである。

これに対し、デンマークのアンデルセンは、その流れを受けつつ、その前提を覆した。創作童話「小さいイーダの花」は、妖精こそ登場しないが、超自然的な世界が現実と同じ地位を与えられ均衡を保っているのである。この話は現実と空想が屹立しつつ関係し合うという多重構造を持つ「物語」となっており、ファンタジーと呼ぶことができる。つまり、少女イーダが夢の中で見た世界は心的現実として客観的正当性を問われることなく一つの信念として成立し得るということである。そうした現実と空想の均衡を通して、イーダは子どもなりの理解の仕方での命の神秘を知り、新たな現実が立ち上がっているのである。アンデルセンは、事実ではないかもしれないことを認めながら、

目に見えないものを信じることの愉悦を自覚的に選択したのだ。それは、人生経験の少ない子どものナイーブな憧憬によって現出するような架空の世界についての深い理解でもあった。

こうした不信の保留によって作り出される心の場所は、まさに子どもに特有の心理現象の中に見いだされるものである。発達心理学によれば、子どもたちは五歳くらいになると、現実に対する「一元的」思想から、複数の「現実世界」を同時に生きる「多元的」思想の世界に本格的に足を踏み入れ始めるという。このような一元的思想から多元的思想への発展は、そのまま前述の妖精物語からアンデルセン童話における目に見えないものを「信じる」ことに対する態度の相違におきかえることが可能である。

ファンタジー児童文学は、近代における啓蒙という理性優位の立場から切り捨てられたものをすくい上げようとする芸術領域である。ファンタジーは現実から、子どもは大人からそれぞれひとたび切り離された上で再び浮かび上がるようになった。子どもと実用的フィクションが結びついた物語の中は、子どもや精神分析の患者だけでなく誰にとっても自由な創造的感性を持つことが可能な多重構造となる。すなわち、宗教的なものが大手を振って闊歩できるような広々とした時空が創出されるのである。近代以前からの宗教の伝統は、その中に自然と流れ込んでいったといえよう。大人と現実が優位となった近代概念としての「宗教」は、この世離れしているがゆえに愉しむことができる他界を奪ってしまったのであり、そこで失われたものが、物語の中で、限定的再構成が施されて新しい生命力を得る

ことになったのだ。優れた児童文学作品の中にはそれを通して近代社会ではうまく機能しなくなっている「宗教」を再創造する方向に働き、再解釈されることで大きな飛躍を見せる場合があるのである。児童文学の中で、現実を超えた空想の世界を信じることの愉悅を味わいながら、それらを心の深いところに確立することが可能となると、そこには伝統的なものと近代的なもの融合した新たな宗教性が顕現しているのである。

宗教体験の語りの諸相とその現代的意義

村 上 晶

周囲の人々にとっては些細なことのように見えても、本人にとっては、人生を変えるほどの大きな意味を持つものとして解釈されるような体験がある。「スピリチュアルカウンセラー」を自称する人々にとって、普段の何気ない体験も、「神」や「天使」からのメッセージとして際立たされ、特別な「スピリチュアルな」体験として語られる。そしてそうしたエピソードの一つ一つが、現在の自己とその人生を語る上で欠かせない要素となっている。

そこで本発表では、二人の「スピリチュアルカウンセラー」(共に女性)の語りを例としながら、現代社会における宗教体験の語りの諸相と、その意義を見ていった。

彼女たちの語りに共通していたのは、現在、自らの身に起こった体験をスピリチュアルなものとして解釈することに対して

は揺るがない確信を持っているのに対して、過去、とりわけそうした体験を始めた頃とされる段階では、そうした体験に戸惑い、疑いをもっていたことが強調されているという点である。しかし、多くの不思議な体験が積み重なることによって、それが「神」や「天使」の意志によるものであるということを認めざるを得なくなったと語られる。

語りのうちに認められるこうした段階を、帰属理論の視座も借りながら詳しく見ていくと、まず初期の段階では、体験の解釈について超越的実在に直接的原因を求めることが躊躇されており、その因果関係は未確定のまま保留されていることがわかる。しかし、そうした躊躇いは克服され、本人たちが、「確信」という言葉を用いて説明しているような段階、つまり、体験の因果関係を超越的実在へと帰属させることによって、ある体験が単なる「不思議な体験」ではなく「宗教的と見なされる」(Taves)段階に至るといって過程が見出せる。そこから、彼女たちの語りが、自らの体験に対する解釈の転回という出来事を中心にした段階的な物語として構成されていることがわかる。

さらに、彼女たちの語りに特徴的な点として、体験中心的な側面と諸要素のブリコラージュという点を指摘する事が出来る。彼女たちが「確信」の段階で獲得したとする新たな意味体系は、教団の教義や宗教伝統などのある特定の意味体系に依存するものではなく、様々な対象から選択され自分に見合うように構成されたものである。そこでは従来、体験を意味づけ評価するものであった教義や伝統といった外的参照枠が、逆に体験によって評価されるものとなっている。